

として書かれており、新規性の高い情報も多い。とはいえ、水産物に焦点をあてている以上は仕方がないことではあるが、情報の充実した分類群とそうでないものの差は大きい。これは著者の好みによる部分が大いなのであろう。そういった点において、種によっては、やや情報が物足りない印象があることは否めない。

総括すると、本書は沖縄県の水産物を知るうえでの必読書といえるであろう。冒頭にも述べた通り、沖縄県の水産物はその種組成から文化的側面まで県外とは大きく異なっている。また、沖縄県に分布する魚種の多くは、黒潮の影響で鹿児島県の島嶼群（薩南諸島）から南日本沿岸域、さらに小笠原諸島、ときには北日本にまで分散することを踏まえると、黒潮という日本列島に多大な影響を与える海流の上流部にあたる沖縄県の魚種について理解を深めることは、極端に言うと日本の魚類について理解を深めることと同義といえる。そういう意味においても、本書は日本で魚類学に関わる研究者であれば所持して決して損をしない一冊である。また、漁業者や釣り人に対しても、

漁獲物、釣獲物に対する知識を深め、研究分野との連携にもなりうる適切な取り扱いへとつながることが期待される。沖縄県の水産業が抱える大きな課題として、これだけ豊富な水産資源を抱えながら、その消費量は全国でも最下位に沈んでいることが挙げられる。その理由には、多様な魚種が採れることに起因する、美味しいのか分からない、調理法が分からない、そもそも魚の名前が分からないからどう調べて良いのかも分からない、という知識の不足も少なからず関係するであろう。漁師や市場関係者、釣り人たちが本書を片手に魚をみながら、これでもない、あれでもないとユンタク（雑談）している、そんな日が来れば沖縄県が抱える問題も少し解決するかもしれない。知るということは、それだけ生物との距離が近くなることである。本書が沖縄の魚を知るための大きな助けとなることに疑いの余地はない。

（小枝圭太 Keita Koeda：〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学総合研究博物館 e-mail: koeda@um.u-tokyo.ac.jp）

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌 68(2):195-197
2021年11月5日発行

追悼

中村 泉博士の逝去を悼む



写真1. 中村 泉博士 (1938-2021).

舞鶴の巨星が落ちてしまいました。日本魚類学会の元評議員でマグロ研究の第一人者であった中村 泉先生が3月22日に急逝されました（写真1）。82年にわたる海の男の色濃い生涯でした。中村先生は長年、高血圧に悩まされて来られましたが、不運にも5年前に舞鶴市内において脳出血で倒れ、左半身不随となってしまいました。以来、設備の充実した京都市内の施設で精力的にリハビリ

リ生活を送られてきました。倒れられた直後は飲み込むこともできないくらいの症状だったのに、リハビリのこともあって、健康上の問題は全くなく、食も進み、元気な日々を送っておられました。それゆえ先生の急逝は全く予期せぬことで、最後の幕引きはサプライズでした。亡くなられた直接の原因は喉から3.5 cmのリングが見つかったことから、どうやら朝食中に食べ物を喉につまらせたことのようにです。奥様の禮子様のお言葉を借りれば、「本人にはまるで似つかわしくない童話「白雪姫」のストーリーのよう」とのこと。たまたま手帳のメモに遺言が残されていたので、そのとおりに葬儀を行わず、うちうちでお別れ会だけを済ませました。コロナ禍であったことに加え、一同に会することも極力避け、先生のご希望通り、ベートーヴェンのチェロソナタ第3番が流れる中、執り行われました。

中村先生は1938年（昭和13年）12月24日、名古屋市にお生まれになりました。根っから海が好きで、海とのかかわりを持ちたくて1958年京都大学農学部水産学科に進学され、大学院を経た後、舞鶴において約40年間にわたりマグロ・カジキ類を対象に魚類の分類について研究を続けてこられました。舞鶴といえば、日本の魚類分類学の基礎を築いた松原喜代松教授（1906-1968）の指導の下、数多くの魚類学者が学んだ聖地です。当時、水産学科の学生は2回生まで吉田（京都市）の教養部で、3回生からの専門課程を舞鶴でそれぞれ学ぶようカリキュラムが編成されていました。舞鶴のキャンパスは旧海軍の施設を受け継いだものであり、学生たちは寮生活を通じて青春を謳歌していました。舞鶴で学ぶ院生・学部生達はいわばファミリーを構成し、私は中村先生から尼岡



写真2. 京都大学舞鶴水産実験所水産生物標本館の完成を記念して開催された第1回魚類分類談話会の集合写真(京都府舞鶴市; 1984年11月3日撮影). 日本の魚類学を先導してきた多くの先輩方が居並ぶ. 前列左端が主催者の中村 泉先生.

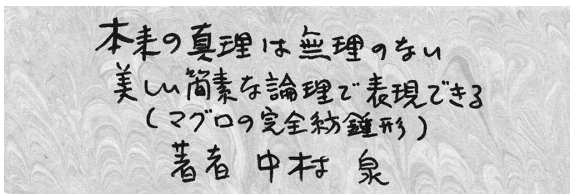


写真3. 「マグロ学」に思いを込めた中村 泉先生の格言.

邦夫博士(北海道大学名誉教授・魚類学会名誉会員), 川合真一郎博士(元神戸女学院大学学長), 宮崎信行博士(東京大学名誉教授)らと過ごした, 紙面ではご紹介できないような, うらやましくもあり楽しい逸話を聞かされました. 折しも私が入学した前年の1970年から専門課程も北白川(京都市)へ移転し, 舞鶴の施設は農学部附属水産実験所に名称を変え(現在の名称はフィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所), 教官のうち中村先生だけが実験所に残りました. 松原魚学を純粋に引き継ぐ, まさに舞鶴の防人となられたわけです.

1984年1月に舞鶴水産実験所内に水産生物標本館があらたに建てられました. そこには松原コレクションを中心に約3,000種, 30万点もの魚類標本が収められています. なかには数多くの貴重なタイプ標本も含まれています. 当初, 標本の整理には中村先生ご夫妻, それに本学から出向かれた中坊徹次博士(京都大学名誉教授)を中心に院生諸氏が当たられ, その後の管理は実質, 奥様の禮子様によってなされ, 現在では甲斐嘉晃博士に引き継がれています. 標本館の完成を祝って, その年の秋には第1回「魚類分類談話会」が開催され, 標本館の建設計画に深くかかわった岩井 保博士(京都大学名誉教授)をはじめ, 日本中の魚類学者が参加されました. さながら魚類学会舞鶴支部の総会のようなものでした. もちろんその主役は中村先生でした(写真2).

中村先生の研究のスタイルは, 何ととっても, 魚類の形態が持つ適応的意義を深く考え, 実際にその推論について海洋調査を通して生態から検証するというきわめてシンプルな手法です. しかもそこから展開される生物の進化に関する考察は, 分かりやすく壮大です. なぜなら, その根底には常に生命の起源の場である海を念頭に入れた自然観があったからです. 実際, 中村先生のご高著「マグロ学」(2011年, 講談社)にはご自身の生物哲学が貫かれています(写真3).

中村先生の性格といえば, ラグビーで鍛えた体が表すように剛毅, 反面シャイで誰にでも気配りをする心の優しい先生でした. それゆえ内外を問わず友人の多さにおいては誰にも引けをとりません. ダンディで私が初めて拝顔したとき以来いつもお髭をたくわえられ, その風貌から外国の香りを漂わせていました. そのため私がお案内したなじみの飲み屋のマスターから英語で話しかけられることもしばしばありました. 実際, 研究・調査で訪れた国は90カ国を超え, 京都大学水産生物学研究室の歴史の中においてもっとも外国の魚類学事情に精通した卒業生でした. その証拠にカナダを拠点とするEnvironmental Biology of Fishes誌のeditorを長年務められていました. 中村先生が海外へ飛び出す原点は水産庁のマグロ資源調査にあります. 「どくどくマンボウ航海記」(北 杜夫著)の舞台となった「照洋丸」をはじめ, 漁業調査船による航海は15回にも及びました. そればかりか, 学位取得後は留学や研究・教育指導のため, 世界中に派遣されています. 海外に向けた広い視野と姿勢は奥様の禮子様とも共有されていたと同時に, 現在, 民放の外信部においてディレクターを務められている一人娘の中村 渚さんにも伝えられています.

中村 泉博士の留学・海外派遣歴

- ・オーストラリア博物館魚類部 客員研究員(1974-1975年)
- ・国立スミソニアン研究所自然史博物館魚類部門 博士研究員(1981年)
- ・フランス国立自然史博物館魚類部 研究員(1985-1986, 2001年)
- ・イスラエル・ヘブル大学魚類博物館 客員研究員(1993年)
- ・チュニジア国立海洋科学技術研究所魚類部 JICA 海外ボランティア・専門家(2002-2005年)
- ・スタンフォード大学ホプキンス臨海実験所マグロ研究保全センター 賛助研究員(2011-2012年)

京都大学農学部水産学科を卒業した諸先輩をさしおいて, 舞鶴での下宿生活を体験していない私には, もとより中村先生の訃報をお知らせする資格はありません. ただ, 先生には私の魚類の系統進化に対する考え方についてももっとご理解いただいたことに加え, 晩年, 闘病中の先生を少しでも見届けることができましたので, 私の

中村先生に対する個人的な思いはひとしおです。中村先生の遺言には、墓は作らないが、岡山のご一族のお墓の石板に「ここに海とマグロとカジキを愛した男眠る」と刻み、海に散骨するよう記されていました。ご遺骨はしばらく奥様の禮子様が見守る中、舞鶴のご自宅に安置されています。いずれ遺言通りに、生命の起源である海の中へ戻ることになるでしょう。

合掌

(細谷和海 Kazumi Hosoya : 〒 631-8505 奈良市中町 332-204 近畿大学農学部 e-mail: hosoya@nara.kindai.ac.jp)

魚類学雑誌 68(2):197-199
2021年11月5日発行

トピックス

日本魚類学会若手の会イベント 「標本作製セミナー」の開催報告

日本魚類学会若手の会（以降、本会と称する）では、2021年7月3日に現地参加とオンライン参加が選択可能なハイブリッド形式でのイベント「標本作製セミナー」を開催した。本稿ではその開催経緯や内容について記す。

開催の経緯

本会では、2019年の設立以降、会員間の交流と情報交換を目的として年1回程度のイベント開催を活動目標のひとつに掲げている。しかしながら、2020年は新型コロナウイルス感染症の感染拡大によりイベントを開催することができなかった。2021年のイベントは感染拡大状況に左右されないオンラインでのセミナー開催を前提として検討を行った結果、標本作製をテーマにして開催することになった。標本作製は魚類学、特に分類学の基礎的なスキルの一つであるが、分類学以外の分野を主とする研究機関では習得の機会がない場合が多い。また、研究者によって少しずつ手法が異なるため、他者の手法を学ぶことで自身の技術研鑽につながることを期待された。講師として神奈川県立生命の星・地球博物館の瀬能 宏氏を招き、同博物館の和田英敏氏（本会会員）にはその補助にご尽力いただいた。また、同博物館との共催事業とすることで開催に際しての全面的なご協力を賜った。

イベントの告知

本イベントは原則として「若手の会会員」であることを参加条件とした。これは、本会が若手の人材育成を主眼に置いて運営されているためである。イベントの告知は学会メーリングリスト、若手の会メーリングリスト、

および若手の会の Twitter アカウント (@young_fish_isj) にて行った。学会メーリングリストでは、セミナーの参加資格に該当しない受信者も多いことからセミナーの開催日時や概要についてののみ掲載し、参加希望者は若手の会ホームページで詳細を確認するよう促した。若手の会メーリングリストでは詳細や参加登録の方法等を掲載し、速やかに登録ができるようにした。Twitter アカウントでは学会メーリングリストと同様に簡潔に案内を発信した。今回のセミナー周知をきっかけとして14名の新規入会者があり、本会の活動を魚類学会の会員に周知する一定の効果があったと考えられる。

開催方法

前述の通り、ハイブリッド形式での開催とした。会場は神奈川県立生命の星・地球博物館を利用し、オンライン参加者向けには Web 会議サービス (Zoom) を利用した。標本作製では口頭で伝え難いような手元の細やかな工夫を視覚的に伝授することが必要である。そこで、講師の手元を鮮明に映すためにデジタルビデオカメラ、タブレット端末、スマートフォンを用意し、状況に合わせて撮影機器を適宜切り替えながら配信を行った。オンライン参加者には「視聴のみ」「リモート実習形式」のどちらかを選択できるようにした。リモート実習形式とは、講師の解説を視聴しながら参加者も手を動かすことで擬似的な実習を体験してもらうためのアイデアであり、オンライン料理教室に着想を得たものである。参加者も手元の映像を全体に共有することができ、講師から適宜助言を受けることができたようにした。なお、世話人の多くも遠方への移動が困難な状況にあったため、本会庶務の宮崎佑介氏（白梅学園短期大学）が代表して訪問し、現地での設営や進行を担当した。

当日の内容

当日は30名の会員が参加した。当時の会員数は61名であったため約半数が参加したことになる。現地参加は2名、その他はオンライン参加であった。オンライン参加のうち11名はリモート実習形式での参加であった。

瀬能氏にはまず「なぜ標本を作るのか」について講義をしていただいた。魚類学において、綺麗な標本を作り、写真を撮影することの意義について、実例を交えながら初学者でも理解できるようご説明いただいたのち、実際に標本を作る過程を一通り実演いただいた(写真1)。「この作業がなぜ必要なのか」という観点からの解説を受けながら実演を視聴したことで、参加者もひとつひとつの工程の意義を理解できたのではないだろうか。その後、実習形式での参加者の画面を共有し、各自が作製した標本に対して瀬能氏から指導をいただいた。使用機材によっては画面越しでの確認に手間取る部分もあったとはいえ、各参加者が工夫を凝らして手元を映すことで、画面越しでも細かな点まで指摘を受けることができ、より良い標本に仕上げることができていた(写真2)。

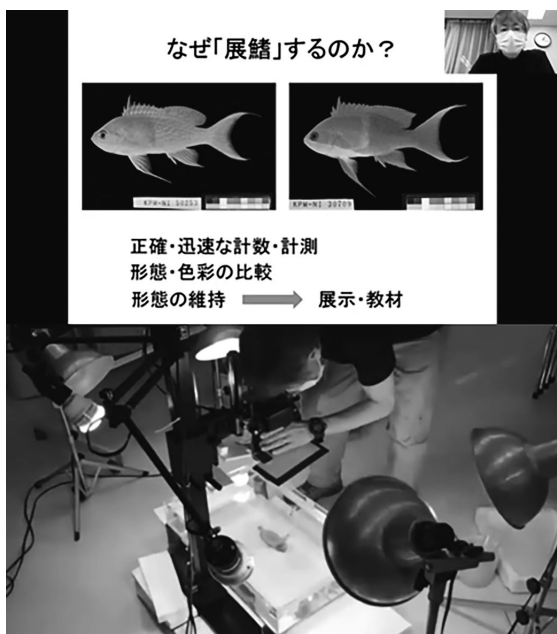


写真1. 瀬能氏による解説の様子。講義ののち、解説を交えながら実演いただいた。

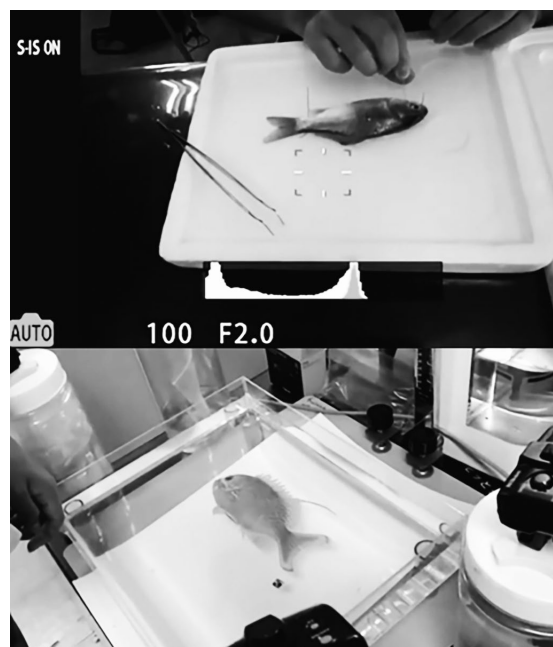


写真2. リモート実習形式の様子。作業状況の中継することで、講師や他の参加者から指導を受けることができた。

アンケート結果

今後のイベント運営へのフィードバックのため、アンケートを実施して参加者から意見・感想を募った。セミナー全体を通して概ね高評価をいただくことができ、特に開催方法や開催日時が参加しやすかったことが評価された。また、瀬能氏の標本作製を見る機会が得られたことを喜ぶ声も多く寄せられた。若手研究者が先達の手法を学べる機会は多くない。技術の伝承に貢献できたことは本セミナーの目的を達成するものであり、世話人会としても大変安堵するものであった。一方でいくつかご指摘をいただいたので以下に紹介したい。「初学者向けを謳っていたが、内容はすでに標本作製をしたことがある人に向けたもので、初学者にはやや難しかったかもしれない」という意見が複数寄せられた。これはオンラインセミナーの性質上、参加者の様子をうかがいながら細かなところをケアすることができないため、最低限の知識を有する前提で開催したことに起因する。また、一部議論が白熱した場面もあり、中級者以上にとっては有益な情報が多く飛び交っていたが、司会進行による初学者へのフォローが不足していたかもしれない。「若手の会会員に限るクローズドなイベントではなく、参加資格に制限のないオープンなイベントにしたほうが若手の会の会員増加や活性化につながるのではないか」との意見も寄せられた。これは企画時に世話人会の中でも議論があったが、一般向けのイベントとすると聴講者のレベルを低く設定せざるを得ず、会員が求めるクオリティのイベントが提供できない可能性があった。実際に、本セミナーでは最低限の知識を有する学生、若手研究者が参加して

いたが、そのような状況であっても初学者へのフォロー不足が生じた。また、本会の発足後、新型コロナウイルス感染症の影響により、会員に十分なサービスを提供できていない状況でもあったため会員限定のイベントとして実施することになった。本セミナーの開催によって入会希望者が増加したことからも、参加者にとって有益なイベントを提供できれば会員の増加と活性化は達成できるものとする。一方で、一般社会への魚類学の普及や教育活動は若手研究者にとっても重要な責務であろう。今後、若手の会会員が講師を務める一般向けのイベント等を通して社会貢献を行っていくことも必要かもしれない。その他にも運営や進行に関して貴重な指摘を多くいただいた。今後のイベント開催に活用していきたい。

今後への課題

新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、様々な面で学会員の研究活動に支障をきたしている。2020年、2021年の魚類学会年会はオンラインでの開催となった。研究発表の場が設けられたことは特に若手会員・学生会員によって有益であった一方、オンラインでは様々な立場の学会員とコミュニケーションを図ることはやや難しく、交流の機会が失われていることは否めない。年会は研究発表の場であると同時に、多くの研究者との交流をもてる貴重な機会である。年会での交流をきっかけにして自身の研究の研鑽だけでなく共同研究に繋がることも珍しくない。一方、若手会員の中には直接の面識はないもののSNSで交流を深め、共同研究を実施している例もある。交流機会を創出することは若手の会の重要な役割である

が、時流にフィットした交流方法を模索していくことも必要かもしれない。

本会は2021年9月をもって世話人会が新体制へ移行した。今後2年間は小枝圭太新会長（東京大学総合研究博物館）のもと、國島大河氏（和歌山県立自然博物館）、園山貴之氏（下関市立しものせき水族館）、田畑諒一氏（滋賀県立琵琶湖博物館）、福田和也氏（広島大学大学院統合生命科学研究所附属臨海実験所）により会の運営が行われる。若手会員のニーズに寄り添った有意義な活動を期待したい。なお、本会では随時入会を受け付けている。詳しい情報は若手の会ウェブサイト（<https://young-fish-isj.wixsite.com/index>）をご覧ください。

最後に、本セミナーに多大なるご尽力をいただいた瀬能 宏氏、和田英敏氏をはじめ神奈川県立生命の星・地球博物館のスタッフの皆様にご心より御礼申し上げます。初めての試みにも関わらずご参集いただいた参加者の皆さまにも感謝申し上げます。また、設立から今日に至るまで、本会の活動には多くの方々からご支援を賜った。前世話人会を代表して御礼申し上げるとともに、今後も本会への変わらぬご支援を賜りたくお願い申し上げます。

（木村祐貴 Yuki Kimura：日本魚類学会若手の会前庶務：〒599-0311 大阪府泉南郡岬町多奈川谷川2926-1 地方独立行政法人大阪府立環境農林水産総合研究所水産技術センター e-mail: KimuraY@o-suishi.in.arena.ne.jp）

魚類学雑誌 68(2):199-199
2021年11月5日発行

編集委員会からのお知らせ

魚類学雑誌での J-STAGE Data の導入について

魚類学雑誌では2022年よりデータリポジトリサービス「J-STAGE Data」（<https://www.jstage.jst.go.jp/static/pages/JstageData/about-char/ja>）を導入することになりました。これにより、本誌でも電子的補助資料（Electronic Supplementary Material: ESM）の使用が可能になります。また、J-STAGE Data に登録される各種電子資料には DOI（Digital Object Identifier）が付与され、論文と ESM との恒久的対応も担保されます。したがって、印刷媒体や頁数の都合で紙面への掲載が難しい電子資料（動画データ、画像データおよび表データ）を論議の材料・根拠として使用することができ、他者がそれらを引用情報として提示することも可能になります。詳細は準備が整い次第に学会ホームページに掲載しますのでご確認をお願いします。不明な点がありましたら、編集委員長の小北、もしくは和文誌主任の田城までご一報ください。

（瀬能 宏 Hiroshi Senou：日本魚類学会会長：〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499 神奈川県立生命の星・地球博物館 e-mail: senou@nh.kanagawa-museum.jp；小北智之 Tomoyuki Kokita：日本魚類学会編集委員長：〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡744 九州大学大学院農学研究院動物・海洋生物科学講座 e-mail: kokita@agr.kyushu-u.ac.jp；田城文人 Fumihito Tashiro：日本魚類学会和文誌主任編集委員：〒041-8611 北海道函館市港町3-1-1 北海道大学総合博物館水産科学館 e-mail: fumihito.tashiro@gmail.com）

会記・Proceedings

魚類学雑誌 68(2):199-201
2021年11月5日発行

2022年度年会のお知らせ

2022年度年会の予定をお知らせします。詳細については2022年4月に出版される魚類学雑誌69巻1号に掲載します。

期日：2022年9月16日（金）-19日（月）
または9月17日（土）-20日（火）
（但し、変更の可能性あり）

会場：大阪公立大学杉本キャンパス
〒558-8585 大阪市住吉区杉本3丁目3番138号

シンポジウム・セッションの申し込みについて

2022年度年会でシンポジウムまたはセッションを計画されている会員は、下記の要領で申し込み書類を作成し、電子メールで担当庶務幹事までお送りください。会場および日時の制約上多数の申し込みがある場合には調整を計りますので、あらかじめご了承ください。なおセッションとは、シンポジウムのように1日を費やすほど大規模ではないが、年会参加者に関心の高いトピックを同じ時間帯に集め、1-2時間（1時間あたり最低3人の講演者）を限度に、より突っ込んだ議論をしようというものです。コンパクトなテーマの際には是非ご活用ください。

申込先：〒005-8601 北海道札幌市南区南沢5-1-1-1